

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1 電話(078)431-4341

第20回公開講演会

「アール・ヌヴォー・ポスターと日本」

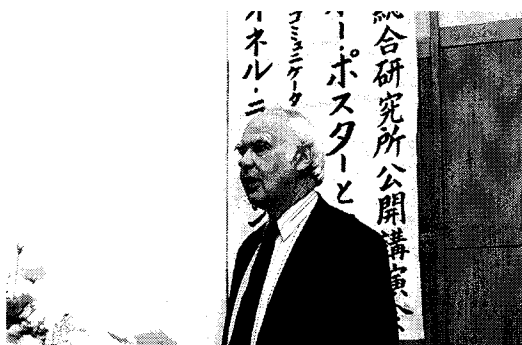
ヴィクトリア・アルバート博物館美術部長

ライオネル・ランボーン

西條 隆雄 (通訳)

今日は、ネオンの光がピカデリー・サーカスのようなロンドンの中心地で公衆におしつけがましいメッセージを綴るよりも遙か昔、あるいはテレビのコマーシャルが、夕方テレビの前にどっかり腰を下ろしているときに、40秒間のおしつけがましい宣伝をするよりも遙か昔に、みなさんをお連れしたいと思います。

ポスターの仕事は最近変わりました。それは、広告の主たる力がいまやテレビを通すようになったからです。ポスターの役割は今では交通渋滞の中で、あるいは地下鉄を待つ私たちを活気づけることにはほぼ限られているからです。でもポスター芸術には長く魅力ある歴史がありました。そして、その黄金時代は19世紀と20世紀の変わり目のアール・ヌヴォーの時代でした。



ジカル「サン・トイ」のポスターを作りました。これが世紀の変わり目にヨーロッパ中で大ヒットとなりました。アール・ヌヴォーのしなやかな線は日本からの借用であるといえましょう。

版画の知識は、版画がすぐ手に入ることもあり、また『図説パリ』のように日本の特別号を編んだ雑誌によって広く行き渡っていました。それに、広重のような日本画家から借用した、影響力の強い図案は、シルエット技法を巧みに用いることでした。彼の木曾街道の版画にはすばらしい技量でそれが使われています。

リトグラフィーのポスターと同じく、日本版画的虹色を出すには、一色また一色と、色を重ねて行かねばなりません。版画の場合は、何枚もの木版からつくって行きます。輪郭が太く彩色部分は平板なので、いきおい図案は単調となり、西洋の芸術家が通常目的とするリアリズムに近づくことはありません。

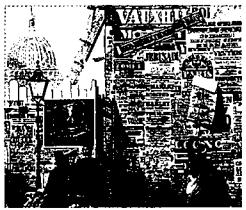
木版画とリトグラフィー

日本の木版画は1880年代、1890年代の英仏のアール・ヌヴォー・ポスターに最大の決定的影響を与えました。例えば、国芳の扇子の版画をご覧ください。弁慶が「波よ静まれ」と祈っている場面です。ここでは、波、および船の帆が高度に様式化され、うねるような曲線をつくっています。ウィーンのポスター・デザイナーであるラファエロ・キルヒナー(1876~1917)は日本の背景を取り入れ、喜劇ミュ-



ただきたいと思います。

ポスター図案家と同様、日本の版画家は独立してやっつけ仕事ではありませんでした。画題も、人気あるお茶屋、名伎、歌舞伎の最新作の人気スター、横綱に限られています。こうした画題は、ヨーロッパで広告を作るポスター図案家のそれと似ています。食べ物、飲み物、化粧品、新作の芝居、歌手、スポーツ選手の広告です。例えば、春章の描いたお茶屋の美人の一人と、そのパリ版ともいえるシャンペンのポスターとの比較は、面白いものがあります。



しかし、ロンドンやパリのような首都の壁に図案ポスターが貼られる以前はどうであったのでしょうか。当時は、活版印刷による広告だけが、駅伝馬車の出発、芝居やオペラの興業、あるいは船の出航といった出来事を公衆に伝えたのでした。この魅力ある絵は1840年代にビラ貼り人がオペラのポスターを貼っているところです。「勤勉な蚤を見ることがありますか」と書いた蚤の見せ物や、「ひげそりは簡単」と書いた、ひげそりクリーム of の広告も見えます。唯一の図柄は荒げりの木版画で、「ボンペイの破滅、アデルフィ劇場で毎晚上演」を広告したものです。

リトグラフィーという新しい方法は、当初、版画に似たやり方で使われました。というのも、画家はこの新しい方法に内在する、色彩実験の大きな可能性に気づくにはしばらく時間がかかったからです。リトグラフィーの方法は、1798年、ドイツ人アロイス・セネフェルガー（1771～1834）により発明されました。最初につけられた名はギリシャ語からとった Poly Autography、つまり文字どおり「たくさんの肉筆」という意味で、プロセスのある考えを示しています。たいいていの図版プロセスとは異なり、表

アルフォンス・ミュシャ（1860～1939）の「サロン・デ・サン」の展覧会ポスターには、彼のような芸術家が、歌麿のような芸術家の描く美人の大きな顔にいかにも注意を払っていたかがわかります。歌麿の描いた、巻物をもつ芸伎をよくご覧

面に刻み込む沈み彫りではなく、石版の表面に線とか筆使いが付着する方法です。

リトグラフィーを用いる描画ポスター作家は、当初は新しい方法を使うことに神経質でした。そのことは、シャム（1819～1879）による1870年版コミックアルマナックのポスターが示しています。そこには赤と青が人物や文字にごくわずか加えられています。シャムはフランス第二帝政のもっとも人気ある滑稽画家の一人であったにもかかわらず、色彩に独立領域があることの可能性を開拓しようとはしませんでした。

これがジュール・シェレ（1836～1932）の出現とともに劇的に変わることになりました。この人は、1836年から1932年まではほぼ一世紀近く生き、彼の生涯にわたる作品はニースにあるシェレ博物館で見ることができます。

シェレ



1870年代のはじめ、シェレの鮮やかな彩色ポスターがパリの壁を彩りはじめ、1890年代にはその頂点に達します。彼の円熟期の二つの作品、一つは1893年作のフォーリー・ベルジュール・ミュージックホールのポスターで、もう一つは1895年作のサクソレヌというランプ石油のポスターですが、そこには彼の美しい赤毛の妻が描かれています。彼女は彼のポスターの多くを飾り、「ラ・ジェット」として知られるようになりました。シェレは13才でリトグラフィーの専門家に弟子入りし、10代の後半には小説のカバーデザインを始めました。やがて1858年、初めてオッフエンバッハの「地獄のオルフェ」のポスターを制作し、ここで赤、緑、黒の三色を用いました。彼の作品は、香水づくりのリンメル の注意を引きました。リンメルはロンドンで彼に仕事を与え、かくしてここで7年を過ごした彼は、貴重な技術的發展を得て、より大きな図形のポスターをつくるできるようになりました。1869年には「ヴァレンティーノ舞踏会」の彩色リトグラフィーを初めてデザインしました。何色かを重ね刷りし、用紙の地肌を色として使い、これまでは達成できなかった結果を手にしたのでした。

シェレは他の誰にもまして、これまでの活字ポスターから描画ポスターへの切り替えを成し遂げた人でした。彼がポスターのデザインを始めるのは、ナポレオン三世がパリの古く狭い道路を壊し、ハウスマン男爵が両側に大きな白亜のビルの並ぶ、大通りを作っているときでした。こうした建物の壁は、新しく出現した派手なポスターを貼るのにうってつけでした。パリは公衆の中に生息しています。多くのパリっ子は、どこにでもあるたくさんのカフェの一つで食事を、いや朝食をすら取るのでした。食前酒の時間となると、パリの人々の半分は歩道の小さなテーブルに座り、他の半分が行き交うのを眺めます。彼のポスターはマネの称賛を受け、「街のワトー」と呼ばれ、またドガからは「大通りのティエポロ」と呼ばれました。事実、イギリスの評論家チャールズ・ハイアットとの対談の中で、ポスターは自分にとって必ずしも広告の好ましい形態であるとはいえないが、すばらしい壁飾りになる、とシェレは述べました。大衆芸術の視覚言語を取り上げ、作業中傍らに置いていた蝶の羽のデリケートな色を添え、新しい芸術形態を作り上げたのは、彼の一大業績でした。彼の1890年代のポスターは、クロウザにより「歓呼の赤、賛歌の黄、原始の叫びの青」と、絶妙に形容されました。

彼がどのようにポスターを創るかを見ることにしましょう。まず、フォーリー・ベルジュールのために作ったポスターの初刷りを見てください。ここには赤と黄だけが使われています。次いで青を加えます。これは文字部分に使います。…そしてこんどは最後に仕上がったものを見てください。



目の頃、演技者たち、といっても当代のもっとも有名な歌手たちですが、その演技者たちが大声をあげて舞台を駆けめぐるのでした。観客は盛況の、煌々と照らされたブルバード・デ・カプチーノに足を踏み入れて呆気にとられたのでした。その広告の中で、

シェレはフォーリー・ベルジュールとか、エルドラドといったミュージックホールを描くのが好きでした。そしてまた、オリンピア劇場をも熱こめて描きあげました。これは今もパリの人気あるヴァラエティーホールの一つです。世紀の変わり

シェレはシンバルが大音を出す効果をじつに見事にとらえています。オリンピア劇場は、芸術の殿堂であるオペラ座のすぐ近くにあって、そのオペラ座では、聖灰水曜日の四旬節到来前に、数週間にわたって上流仮面客のカーニバル舞踏会がくり広げられ、第三共和制の熱狂的な喝采を浴びていました。この楽しい仮面行列は、1894年のカーニバル招聘に用いられました。

シェレには、アイススケートの場面を描いたものがありますし、また、一般大衆はつねに劇場という魔力的、幻想的世界を、秘かに一目見たいと思うものです。1882年、風刺漫画家であるアルフレッド・グレヴァン（1827～1892）がモンマルトル通りに蠟人形館を開くと、シェレはその内部にある小劇場の防火幕に、もっと魅惑的なおとぎ話のデザインの一つを描き込んでいます。

大勢の人々が、オペラ座の両翼の背後にあるかわった世界を一目見ようと、この博物館に引き寄せられ、出しものを描いたポスターを買うのでした。著名なアール・ヌヴォーの陶芸家エドワード・ダンムースのスタジオの壁には、シェレの「エトレンヌ」と題した恒年行事を描いたポスターが掛かっています。「エトレンヌ」とは、文字どおりお祭りの贈り物の意味で、こうしたポスターには日本のおもちゃ、扇、お面がよく描き込まれたのです。二十世紀後半にすむ私たちは、1890年代のポスター収集家の勇氣ある行動に大きな恩恵をうけています。と申しますのも、こうした収集家は、濡れたスポンジを手に暗い夜中に散歩、ポスター貼りの作業人が貼り終わるやこれをはがし取っていったからです。作業人が激怒したことは言うまでもありません。

収集はまもなく立派なものと認められるようになり、いろんな人がポスターの画集をめくることができるようにと、特別な試し刷りが発行されました。世紀末のポスター販売店を想起させるこの絵は、ベルギーのポスター作家ラッセンフォッス（1862～1934）の作品です。店の壁にはピアズレー（1872～1898）、ダドリー・ハーディー（1867～1922）、エドワード・ベンフィールド（1866～1925）等のポスターに混じって、歌舞伎の版画に啓示を受けた場面を描く、ミュージカル「サン・トイ」のポスターが見えます。

一般大衆は、文字の入っていないシェレのポスター収集を好みました。例えば、ヨブのタバコ巻紙とか、パスティーユ・ジュローデルといったポス

ターです。シェレは97才まで生き、1,200枚のポスターを制作しましたが、後年、長い人生の終わり頃にこう書いています。「ポスター作家は心理学者でなければなりません。厳しい学業を終え、自分の芸術



術の論理的、視覚的法則に通暁していなければなりません。舗道を歩いたり、車で走っているときに、街頭の風景が目の前を過ぎゆくと、そこにごく平均的な人間をも引きつけ興奮させる何かを作り出さねばなりません。この目的にかなうもの

としては、単純で、魅惑的、しかも心をつかまえてはなさない絵を、明るく、調和ある色彩で描く以外にはないと思います。

「ムーラン・ルーージュ」とロートレック



「ムーラン・ルーージュ」の世界的名声の始まりは、1889年10月6日、そこでカンカン踊りが発祥した時でした。ここは先の経営者の下でひどく下火になっていたのですが、ある実業家が改装を施して夢の宮殿に変え、いくつかの東洋風、アラ

ビア風装飾の部屋をそろえ、また木製の巨象をおいた広い中庭では、ダンスができるようにしたのです。キャバレーがその名をとった風車の羽根は回り続けて今に至っています。シェレのポスターの背後に赤い風車が見えましょう。このポスターを経営者は得々としてトゥールーズ・ロートレック（1864～1901）に見せながら、一方ではダンスホール用に別のポスターを作ってみないかと彼に持ちかけているのです。

大きな呼び物は、近くのミュージックホール「エリゼー・モンマルトル」からやってきたカドリール踊りでした。この狂ったような踊り子たちは、カンカン踊りで互いにしのぎを削り、最高潮に達すると耳をつんざく金切り声を上げ、空中に飛び上がり、開脚座を行うのでした。女性の踊り子たち、とりわけラ・グーリュおよびジャヌ・アヴリルは互いに競

い合い、また関節を自在に曲げる男性の踊り手、ヴァランタン・ラ・デゾセと踊るのでした。「デゾセ」とは、文字どおり、骨なし神童の意味です。みなさんもご存じの有名なポスターのこの下絵の全景に、彼、あるいは彼のシルエットと言った方がいいかと思いますが、が見えます。一方、ダンスフロアの中央には、ラ・グーリュが配されています。ダンサーたちを取り囲むように観客が見えますが、ふたたび日本の木版画風にシルエット処理がなされています。ロートレックにも同じ場面を描いた絵があります。

技術面では、ロートレックは前世代の巨匠シェレから学びました。ここにあげたポスター「コンフェティ」（紙吹雪）は、イギリスのポスター愛好家エドワード・ベラのために制作されたものです。この人は、1894年と1896年にウエストミンスター水族館で、二度の大がかりなポスター展を企画しました。フランス部門はトゥールーズ・ロートレックが選考



にあたり、出展につき添いました。ベラは紙吹雪を作りました。これをロートレックがここに美しく表出していますが、これはシェレより教わった、「spatter」という技法です。顔料を櫛ごしに刷り込んで、石版の表面に散り敷くのです。



有名なロートレックのポスター「快樂の女王」は、『社会の動物園』という題の小説のために制作されました。その小説は、墮落した株式仲買人の生活をいろいろ描いたもので、著者ヴィクトル・ジョーゼがロート

レックに依頼して、太った放蕩者、売春婦、疲れきった女たらしのグロテスクさを出してほしいと申し出たのでした。このポスターが株式取引所に巻き起こした反発は非常に強烈で、一仲買人はこの忌まわしい絵を抹消するために、二人の社員を送り出すほどでした。

石版を石版に積み重ねてポスターの最終版が作られてゆく行程を見ると、テキストが構図の中に描き

込まれて初めて絵が完成するのがわかります。たしかにトゥールーズ・ロートレックのポスターは、絵とテキストの完全な調和を示しています。

トゥールーズ・ロートレックは、日本の版画にすっかり魅了され、自分の作品と引き替えに欲しい版画を手に入れてもよいと考え、また特別な絵具と絵筆を日本から取りよせました。彼の大好きな画題は、大道芸人、踊り子とダンスホール、バーとレストラン、売春婦とその生活で、これは日本の版画に描かれた画題と非常に似通っています。ロートレックには歌麿の借用が目立ちます。モンマルトルの売春宿に滞在したロートレックと、吉原の曲輪に滞在した歌麿の間には、明らかに類似が見られます。彼は歌麿の秘戯画『絵本歌枕』を所持していましたが、これはゴンクール兄弟から手に入れたのでした。

画題の類似はロートレックにとって重要ではありませんでしたが、技術面で日本の版画に影響を受けたこともまた、重要でした。絵と文字を一つの装飾的、教唆的全体として自分のポスターの中に統合してゆくことは、日本の原型に負うところが大きいようです。そこから彼は、一人の人物を中間色の背景にくっきりとシルエットで描き出すことの確信を得ました。



例えば、「ダディーはワンワンを買ってくれない」を歌っているメイ・ベルフォールの他を圧する輪郭は、歌麿の芸者「おひさ」に比べることができましよう。また、ロートレックのあざらしに似た図案文字、これも日本の文字から来ていますが、これはホイッスラー(1834~1903)の蝶よりはるかに真正といえるでしょう。



「ディヴァン・ジャポネ」という店のポスターは、1893年に日本式の灯りや籐椅子の装飾を取り入れて、模様替えしたカフェのためにつくられました。ロートレックは図案として日本の構図原理を採用することにし、彩色した絵は、歌手イヴェット・ギルベールの身体にみるようにちょん切って、特徴ある黒い手袋と、ロートレックが大いに賞賛した踊り子ジャヌ・アヴリル

の優美なシルエットだけで、誰かわかるようにしています。別のポスターでは、この踊り子は「ジャルダン・デ・パリ」に出演しています。これはひらめきにおいて非常に日本的な場面といえましよう。顔こそ楽器をもつ手で半ば隠れていますが、コントラバス奏者が場面の枠組みを支配しています。かわいそうに、ジャヌ・アヴリルはロートレックの描いたポスターでは自分が怪物のように見えるとよくこぼしていました。そして、多くの踊り子は、自分のポスターのデザイナーとしては、年も行き、さほど革新的でない、ジュール・シェレのほうを好みました。

そうした人物の一人が、ロイ・フェラー(1862~1928)でした。彼女は19世紀後半のもっとも革新的で独創的な踊り子の一人でした。彼女が1890年代の視覚芸術および文学に与えた影響には、深いものがあります。マラルメ、アーサー・シモンズ、イエイツといった様々な詩人がすべて彼女から啓示を得て、作品を書いたのでした。加えて、彼女の踊りを画面に描いた人ははかりしれません。ジュール・シェレは、下方から光を当てた一枚のガラスの上で踊る、彼女の有名な火の舞踏を4つの色彩配合で印刷したポスターを作りました。ホイッスラーのスケッチブックの中にも、彼女の蝶の舞に触発された何枚かの下絵が見られますが、その原型は日本です。また、トゥールーズ・ロートレックは、ホイッスラーのスケッチを用いて50枚セットのリトグラフを作りましたが、すべて一枚ずつ手刷りし、そのうえに金銀粉を振りまいて、彼女が使った照明の変化をあらわそうとしました。彼女の仕事を記録する数々のすぐれた絵画、版画、下絵は、オーストリア人コロマン・モーザー(1868~1918)によって制作されました。彼女は装飾芸術にも同様に顕著な影響を与え、彼女のダンスがラウル・ラルチュエ作の青銅像を生み出す一方、照明の方も新発明の電灯を採択して実



にいい効果を生み出しました。

グラッセ(1841~1917)の初期の作品はゴシックリバイバルの建築家、ヴィオレ・ル・デュク(1814~1879)より深い影響を受けました。この建築家は、ピレネー山脈のカルカソーネという町を元の中世の城壁に囲ま

れた状態に復元したのです。グラッセはポスターと似た問題をかかえた芸術の道、つまりステンドグラスのデザインという道において、優れた眼識をもって仕事にかかりました。しかし、ポスター作家としては、グラッセはより複雑な運命を迎えることになりました。1893年に彼は大女優サラ・ベルンハルトがジャンヌ・ダルクに扮した姿を描きます。オルレアン少女はフランス国民のヒロインで、グラッセはこの主題をふさわしく威厳のある姿として仕上げました。しかし絵の厳肅さゆえに、女優の無条件の賛辞を受けることにはなりません。なぜなら、彼女は自分の舞台上の役割をもっと写実的に描いてほしかったからです。そこで数々の変更を求められ、グラッセは不承不承これに従ったのです。

ミュシャ



しかし、グラッセの損失は、アルフォンス・ミュシャに益するところとなったのです。彼はチェコの若くて並外れたデザイナーで、一大幸運が1894年の歳末に、大勢の人々が新作サルドウの「ジスモンダ」を演じるサラ・ベルンハルトの広告ポスターの周囲に集まったときにやってきました。それは体裁においても技法においても、モザイクかフレスコ画を思わせる、高度に独創的で、色調も実に豊かで、少なくとも8ストーン顔料が使われていると考えられました。署名はミュシャとありました。この芸術家はいったい誰で、このポスターはどのようにして制作されることになったのでしょうか。

1860年、モラヴィアに生まれたミュシャは、中央ヨーロッパおよびイタリーで放浪の生活を送ったあと、ミュンヘンとパリにて訓練を積み、ここで広い友人のサークルを作りました。そこにはオーガスト・ストリンドバーク、ホイッスラー、作曲家フレ

デリック・デリウス、またピエール・ボナールからナビスグループにいたるフランス画家たちといった、色々様々な人がいました。1894年のクリスマスにリトグラフィー工房の主人が、ミュシャに一週間以内に大女優の新作劇のポスターを制作してみないかと切りだしたのです。ミュシャは彼女の演技を見たことがなかったので、夕方のリハーサルを見に行きました。ミュシャの大まかな下絵と油彩スケッチがやがて石版に写されて大成功をおさめ、これがベルンハルトから更に依頼仕事を受けることになり、「カメリアの女」「ローレンザチオ」「コルクスの女王メディア」をはじめとする一連の芝居ポスターを制作したのです。

ミュシャはまた、ベルンハルトのポスターを純粋な宣伝目的のためにデザインしました。ここに「ロンテーヌの女王」という芝居で、頭飾りをつけた1896年の大女優の写真と、ミュシャがそこから発展させて制作したポスターがあります。それは、華やかなユリと豪華な胴衣を強調し、流れおちる、波打つ豊かな髪をつけ加えています。

確かにアール・ヌヴォーと「ミュシャ様式」はほとんど同意語となり、彼の名声は世界中に広がりました。彼の著『装飾に関する記録』は、彼の装飾作品の要約であって、自然の分析研究と実践的の教養を含んでいます。これはほとんどアール・ヌヴォーの教科書となりました。彼が制作した、大シャンペン店「モエ・アンド・シャルドン」の広告は、ラヴェンナのモザイクに見られるロマネスク様式の人物をかすかに思い起こさせます。



ミュシャは、タバコの巻紙という、どちらかという下降市場商品の、実に成功したポスターを何枚か制作しました。下降市場というのは、貧しくて既製の巻きタバコが買えない人は、自分で巻いて作ったからです。けぶるジョブタバコを夢見るように見つめるこの神秘的な女性の先祖は、システーナ礼拝堂のミケランジェロの天井画に座っています。この女性は、ミケランジェロの巫女の一人から念入りに写し取ったものです。大きな足指にいたるまで、そっくりです。一方、別のポスターの女性は激しくもつれた髪をしています。0という文

字が頭を後光のように包んでいます。画家の好んだ工夫であります。近視の年寄りの百姓たちが、これと似たビール広告のポスターを見て聖母マアリーの絵と間違え、びっくりしてその絵を崇拜していたそうです。

スタンラン

スタンラン (1859~1923) は、スイスのローザンヌで生まれました。子どもの時に読んだリアリスト作家ゾラの小説は、彼にとって啓示となりました。そこで彼の全作品は、リアリズムのテーマと一致を見ることになります。彼は1881年パリに出、織物のデザイナーとして働き、やがて1890年代にポスター作家として名声を馳せるのです。

ここにあるポスターは、幼少時のゾラへの傾倒を示しています。それはゾラの『居酒屋』の脚本化にほかならぬからです。レタリングが空間を埋めています。スタンランは、洗濯女のジェルヴェが説かれて主人と別れることになった場面を劇的な一枚の絵に描きました。スタンランにとっては、当時の他の画家と同様、酒場は人民のいろんな類型を、さどられずにスケッチできる、最高の機会を与えてくれたのです。

スタンランは猫が好きで、折にふれ数え切れないほどの猫を写生し、猫のラファエロというニックネームをもらいました。ときどき彼は毛並みの効果をつかもうと、ピロードの上に座る猫を描きました。



すぐれたポスターを生み出すヒントとなった、数々の人気ある製品のなかに、自転車があげられます。若く、進取的人々、特に親里の狭くらしい束縛を逃れたいと考えるニュー・ウマンは、とりわけ、自由に動きのある生活に心を寄せました。コミオット会社は、ブレーキからギヤに至るあらゆる部品をとりつけた新しい二輪の輸送機関を宣伝し、若年層にターゲットを絞り、若きスポーツ女性が勇敢にガチョウの群の中に自転車を乗り入れて行く姿を表現しました。畑の百姓は、ジャン・フランソワ・ミレーの田園風景の中から飛び出してきた感じですが、その百姓がびっくりして新流行の乗物を見つめています。

スタンランが猫好きということで、彼はロドルフ・サリの経営する有名な芸術家の会合所「レ・シャ・ノワール」に出入りする資格が与えられました。持ち主のサリは、勇気さえあれば誰にでも詩を朗読し、歌を歌い、ダンスに加わることを許しました。入会の条件というのが、いかなる寄与も「ブルジョワを仰天させる」とのスローガンと一致し、いささかショックを与える類のもでなければならない、というのです。クラブ玄関入口の上には、大きな黒猫がガチョウの首に手を掛けておどろかせている姿が掲げてあります。これは自由奔放な生き方をする人々がブルジョワジーに勝利したことの象徴です。ロートレックがアリスティド・ブリュアンに出会ったのはここでした。彼はもと、鉄道職員でしたが、下賤な歌を歌ってパリの第一線のフォークシンガーとなりました。

もう一つ、クラブでの大きな呼び物となった余興は、影絵芝居、つまりシルエット人形劇でした。これは当時のニュースに対して皮肉っぽいコメントを投げるために行われました。



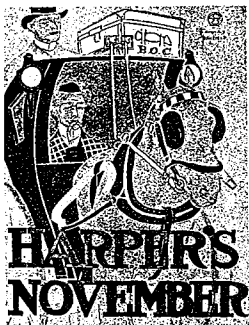
スタンランは社会主義者でした。1899年制作の、二人の歌手モチュとドリアのポスターは、彼の政治的見解をおおむね以上にはっきりと表わしています。それは、陰険ならず者に火を貸してくれと言われたトップハットの男の不審そうな目つきの中に表われています。二人の顔は、悪の世界と上流の華やかな社会の周辺にたむろする人々の日陰の世界との間の、社会的緊張を反映しています。

もう一人、リアリストでスタンラン風のポスター作家は、ルシアン・メティヴェで、この人は作品の質は非常に高いのですが、ポスターはほんのわずしか制作していません。ここに映す作品は、よく知られた歌手、ユージェニー・ビュッフェのために創作されたものです。彼は労働者階級の悲しい定めや貧困の苦しみの歌を元気いっぱい歌いました。こうした類の歌はのちにエドト・ピアフと結びつけられることとなりますが、この人の「いいえ、私はなんにも後悔いたしません」という言葉は、実に強烈な印象を作り出すのです。

ヴィヨン、ハサール、その他

別の画家、主たる名声はのちに抽象画家として獲得されることとなりますが、それはジャック・ヴィヨン (1875~1963) でした。彼もまた驚いたことに、1899年アール・ヌヴォー・ポスターの中でもっともすばらしい作品の一つ「ラ・グリヨン」を制作しました。ムーラン・ルージュでしばしば会ったスタンランおよびトゥールーズ・ロートレックをモデルにしていますが、ヴィヨンのこの作品にはすばらしい力強さと独創性があります。とりわけレタリングにそれが見られ、レストランの粋な「アメリカン・バー」という文字に、見る人の注意を引きつけます。

ヘンリー・ジェームズからスコット・フィッツジェラルドやジーン・ケリーに至るまで、アメリカ人は常にパリを愛してきました。それ故に、アメリカンポスターのデザイナー派があっても驚くにはあたりません。そのデザインには、パリと日本にどこか負うところがあります。アメリカ人、エドワード・ベンフィールドの描く「ハーバース・マガジン」のポスターは、彼が



ごくありふれた場面をスマートに図案化する能力のあることを示しています。

はみ出し構図は日本版画に負うところ多大ですが、一方、ばらまき手法を巧みにかつ想像豊かに用いて達成した豊かな絵肌は、シェレやトゥールーズ・ロートレックに影響をうけていることを示しています。

友人ヘンリー・メヤによる、ベンフィールドの肖像画は、ポスターに繰り返し現れる別のテーマを想起させます。それは多少とも日本版画から来たもので、螺旋状の、波打つようなボタンをした、タバコの煙、髪、水、植物の巻き髭や蒸気がそれです。私は、アメリカ人J.C. レイエンデッカー作の、「象牙石齡——水に浮きます！」のポスターには吹き出さずにいられません。この紳士は、牧師でしょうか——頭には大文字Oの後光がさしています。これはすでにアルフォンス・ミュシャに見た、よく好まれる考案です。

とりわけタバコの煙、これが完璧にアール・ヌヴォー様式の流れるような曲線に適合したのです。1890年代の間、それはゆたい、また渦巻いて、審美

主義者にもそうでない人にも、褒めそやされ続けました。それは「くゆるコンサート」のポスターにからみ、まわりついで、ここに見るブルカンの作例に似ています。そして、すでに述べたように、シェレもミュシャも、美しい長髪のモデルに、けぶるタバコを組み合わせた効果的なポスターをデザインしました。その煙から、JOB という名が生まれました。これは聖書に言及したもので、その意味は、友人たちが苦しめる旧約聖書の人物JOBにもたらしたよりも、より効きめのある慰めが、タバコを通して得られるというものです。

タバコの麻酔の魅力は、『イエローブック』において、詩人ライオネル・ジョンソンが長い賛辞を述べてたたえます。100年を経たいまでは実に興味深い読み物となっています。

雲また雲…人生の投影は青いタバコの煙の輪の中にあり。…雲また雲…それは私を魅了する。朝の露したたる、咲きこぼれる赤いバラよりもなお魅了する。…雲のはて、大気の中に消えて行く。…これぞまこと人生の姿。

青い煙は、渦巻き、流れ去る。青いバゴタ、雪のように白いアーモンドの花、桜の花が、まるで朦朧たる夢のように、輪になり、煌めく。嗚呼、タバコの魔法よ。

1990年代のタバコの箱には、タバコは有害で、健康をひどく損ねると警告していますが、この賛辞ほど現今のタバコと距離を隔てたものではありません。



「ニュー・ウマン」という、この時代の大胆な芝居のポスターではなほ面白いのは、家庭の束縛から解放された若い婦人がうかつにもタバコの尻に火をつけているのであります。多分、読んでいた小説『裸になつてなお恥じず』と『裏切り者の男』に興奮しすぎたからでしょう。ジョン・ハサール (1868~1948) 制作の、エドワード社の粉末スープのポスターの中には、はるかに健康な雲が見えます。

シェレのデザインに見えるカーニバル精神は、ハサールの親友で若い英国画家ダドリー・ハーディーに酩酊するような効果をもたらしました。「黄色い

服の少女」と「陽気な少女」のポスターは、うっとり、男心をくすぐるセクスイアピールをたたえており、明らかにシュレの作品を想起させますが、しかしどこか非常に英国的です。

1894年と1896年の二つの重要なロンドン展における英国派のもっとも独創的ポスターにあげられるのは、ベガースタッフ・ブラザーズ、つまりジェームズ・プライド（1866～1941）およびウィリアム・ニコルソン（1872～1949）の仮名であります。その二人の作品でした。

数年後プライドは回想します。「友人がね、ウェストミンスター水族館でポスターの展覧会があると聞いたと言うんだ。そこで僕たちもそれに向けて作りたいと思い…5つ6つ大きな図案を作ったよ。特定会社の商品のポスターではなく、あとで社名をつけてもいい、ある特定の品物のポスターだ。こうして僕たちはピアノ、ココア等の図案を作ったよ。相当大きなものをね、あるものは12フィートもの高さだから…

僕たちはシルエット処理がベストだと決めた。これは以前に使われていない強みもあった。更に、複製ポスターを作るには非常に経済的な方法でもあった。というのも、色調はすべて一様…この一様な効果を出すために、僕たちは色紙から図案を切り抜き、それを平らな板に張り付けた。

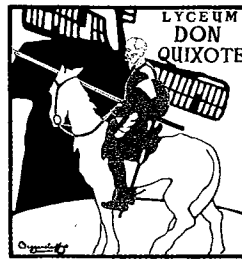


当時の数々の悲劇の中には、今では楽しくも喜劇として笑い飛ばせるものに、ビーフィーター（ロンドン塔の守衛）のポスターがあった。赤、黒、黄の三色で印刷された、含蓄あるデザインで、これが牛肉のエキスにとりわけ適していると考えた。僕たちは会社の事務所にこれを持参し、非常に小さな部屋にこれをピンで留めておいた。しばらくして、サンタクロースみたいな、愛すべき老紳士が部屋に飛び込んで来、ポスターを一目みるや一言も発さずに出ていった。のちに、そのポスターは『ハーパーズ・マガジン』の社主のものとなって面目を回復した。社主は合衆国でこれを自由に複製した。そちらでは大成功だったものだから」

思うに、プライドは今日もなお、その図案が使用されているのを知って喜んでいることでしょう。今では衆知の、ジン——ビーフィーター・ドライブ

——の宣伝に使われています。

ベガースタッフ・ブラザーズのもっとも有名なポ



スターは、大俳優兼経営者であるサー・ヘンリー・アーヴィングのためにデザインした、「ドン・キホーテ」の一幕劇のポスターでした。プライドによると、「片手に長い槍を持ち、背後に水

車を控えて、白馬にまたがる姿を描いたもの」です。もう一つ別の作品、これは無題の図案の一つですが、中央の溝が構図を二つに引き裂いて、日本の書物のイラストを思い起こさせます。

オーブリー・ピアズレーは芸術のあらゆる側面を試みますが、ポスターにも同様にすばらしい独創性をもつ新しい要素をつぎ込みました。1894年、えり抜きの本立の二本立ての新劇のために彼が制作したポスターをめぐる大論争が持ち上がりました。一つは、アヴェニュー劇場で上演される若き詩人イエイツの作品のものでした。『パンチ』誌は語呂合わせがしたくてたまらず、コックニーをもじってこう述べま



した。「アヴェのニューポスターありませ(ave a new poster)」。児童本のポスターに対してもまた、批評が浴びせられました。確かにこの読書中の婦人はどうやら少々大人っぽすぎて、児童本を読む柄ではなからうと思われる。二枚のポスターともに、背丈の高い体裁は、ピアズレーが日本

芸術を好んだことの現れです。それは *The Studio* と呼ばれる雑誌にしばしば載った、日本芸術に関する記事によって培われたものでした。1893年の創刊号の中で、ピアズレーの作品を非常にほめた記事があり、これが事実上彼の人生を歩ませることになったのです。その雑誌のページをめくれば、ピアズレーの作品を当時の他のすぐれたポスター作家、例えばシュレやトゥールーズ・ロートレックと直接比較しながら考察できるのです。彼らはなべて一つのことを共有していました。彼らは日本の芸術に大きな影響を受けており、そのことを認めたのでした。

ここで、広告の仕事に就こうとしている方に、注

意を促す話をいたします。このポスター、海上に投げ出された青年が手に持っているのは牛肉のエキスを、「ボヴリルは、これさえあればお陀仏にはなりません」と述べています。ところが、これはタイタニック号が沈没し、1,500人の命を奪ったのと同じ週に出ました。お陀仏と沈没が一致しすぎて、ひどすぎると言うことになり、取り下げの憂き目となりました。

しかし、今日は二枚の少々ばかげたポスターをお見せしてお別れしたいと思います。これは私の好きなもので、一つはジョン・ハサールのすがすがしい古典的な海岸のポスターで、「Skegness はとてもさわやか」というものです。右は、サーカスのポスター

です。私のファースト・ネームはライオネルです。そんなわけで、私、ライオンにもポスターにも愛着があります。だからミュンヘンでこのポスターを見つけたときの嬉しさを想像していただけるでしょうか。書いてあるフランス語を訳してみますと「ライオネルは雄ライオン、女性と子どもの人気者」となります。彼のアール・ヌヴォーの髪型を見てください。それに彼はシェイクスピアを読んでいるではありませんか。

これら二つの作品は、ポスター芸術の大きな要素の一つ、つまりユーモアと面白味、そして機知を共有しています。ご静聴ありがとうございました。

平成6年度研究活動中間報告

「集団行動の分析とグループウェア」(研究No. 45)

研究幹事 中山 弘 隆
平松 闊
奥野 卓 司
服部 雄一

集団行動の分析はこれまで社会学を中心に研究がすすめられてきたが、近年集団の共同作業を支援するためのグループウェアを構築するために、情報工学、システム工学からの検討が加えられつつある。このグループウェアがもつ最も重要な機能の一つは集団意思決定の支援である。このような集団意思決定支援システムを構築する際に重要なことは、問題発掘や明確化に続いて、構成員が相互理解を深めながら合意形成を促進するようにすることである。本研究ではまず社会学、情報人類学、システム工学、知能情報工学等の様々な観点から集団の意思決定がどのようになされるかを分析し、そのモデル化をはかり、シミュレーションし、つぎに、これによって得られた知見をもとに集団意思決定を支援するためのグループウェアの構築をめざすことを目的としている。それぞれの分担研究の結果は以下のとおりである。

1. 社会ネットワークのモデル化は、これまでどちらかといえば、ネットワーク構造が個人に及ぼす影響、効果の視点から考えられる傾向が強かった。ネットワーク構造特性、たとえば濃度、密度の違いが、個人の役割、その位置、そしてコミュニケーションに与える効果を測定するモデル化が追求さ

れてきた。バランスモデル、クリーク分析に関係したブロックモデルなど。どちらかといえば、これはマクロからミクロへの効果分析であった。

これに対して、ミクロからマクロの生成モデルは、あまり論じられなかった。すなわち、個人がいかにしてネットワークを生成するか、具体的にはたとえば、「人はいかにして友人ネットワークを形成するか」といった問題へのアプローチである。シミュレーションによるネット生成が具体的にコンピュータで作成され、その解析を行っている。

具体的には、Zeggelink (1993) の提出したモデルに改良を加える形で、進めている。もともとstrangerが、どのようにして自らの目的を満足させるために、友人を形成し、それを利用していかを、シミュレーションで形成過程を追いかけている。全体のテーマである「集団の意思決定過程」の分析そのものではないが、その過程の一部を構成し、それに貢献するものと思われる。来年度もこのテーマを継続して、追求したい。(平松)

2. 人間も含めた動物は、もともと集団をつくろうとする習性がある。その中には、積極的なものもあれば、結果的にただ集まっているだけというものもある。いずれにせよ、動物が集団をつくると、次のような様々な生態学的な利益が、その動物にもたらされることが多い：(1)危険が分散される(希釈効果)、(2)全体として警戒能力が高まる、(3)弱い動物でも、集団として闘争力をもつことが

できる（疑似攻撃）、(4)狩猟の際に役割分担ができる、など。

だが、逆に集団を形成することによって、集団内部の闘争は不可避になる。その結果、多くの集団では順位が形成される。順位制は、一旦安定してしまえば、それ以後は不要な闘争を避けることができるという点で、その動物集団に利益をもたらしている。この立場にたてば、動物が集団行動をとる適応戦略の極致が、人間の社会だとみることでもできるだろう。その比較的単純な例として、採集狩猟民の群れ（バンド）をみると、地球上のどの地域においても、ほぼ30名程度の集団であることがわかっている。この数値には、バンドの一日の移動範囲とその中の森林の植物生産量に関係しており、その面積と人口密度は、自然経済においてはほぼ一定に保たれている。

ここまでは、人工生命のプログラムによって、シミュレーションすることが可能だと思われ。だが、人類における、積極的な集団の形成には、利己的遺伝子の拡散の結果としての順位制という理論だけでは説明できないことも少なくない。次年度はこの点をより深く解説するため、近年ピグミーチンパンジーの自然人類学的調査などによって明らかにされつつある、類人猿以降の集団の絆の積極的、意識的な形成をも視野に入れることを考えている。（奥野）

3. 知能情報工学的な観点から、集団意思決定のメカニズムを明らかにするために、委員会をモデルとするニューラルネットワークを構築し、集団としてより良い決定を行うためにどのように委員および委員長が挙動するかを解析するシミュレーションを行った。演算速度を上げるために並列処理が可能なトランスピュータを用い、これによって委員および委員長をモジュールとするコミティマシと呼ばれる複合ニューラルネットワークを構成した。回転文字の認識を例にとり、役割分担をさせた各委員の報告をもとに委員長が最終判断をするという集団意思決定のシミュレーションを行った。各委員にはそれぞれの役割の学習を行わせ、さらに彼らの報告をもとに委員長の最終判断の学習を行わせた。従来から、人間社会でよく用いられている多数決ルールや全員一致ルールは委員長を学習させず、機械的に一定のルールをあらわすモジュールによって最終決定の出力をだすことになるが、回転文字の認識では未学習パ

ターンに対し、認識率はそれほど高くはなかった。これに反し、委員長をも学習させることによって、間違っているが声大きいという委員の主張を退け、声は小さくても正しい意見が通るという傾向が見られた。このことは、人間の社会でも委員会の回を重ねて委員長が状況を正しく判断するようになれば、委員会全体として正しい結論に達することができるという事実を示唆していると考えられる。（中山）

4. 個人の影響力を考慮する一つの手法として、個人の影響力を表現する、個人間の2項関係（従属関係）と個人の選好順序を変数としてもつ集団選択規則が提案されている。この従属関係を変数としてもつ集団選択規則は、従属関係が空であるときは従来の規則と結果が同じになるよう定義されている。しかし空以外の従属関係においても従来の規則と結果が同じになる場合がある。そのような従属関係（均等な影響力を与える従属関係と呼ばれる）は、構成員数が3と4の場合について調べられているが、構成員数が5以上の場合については、基本従属の個数のみでも膨大な数となるため、未だ考察されていない。均等な影響力を与える従属関係はアルゴリズムのもとにコンピュータを用いて調べることが適当と思われる。本年度はそのための準備として、均等な影響力を与える従属関係を隣接行列によって表現し、その代数的な性質を考察した。その結果、いくつかの成果を得た。（服部）

「中深海生物の光環境への適応」(研究No. 46)

研究幹事 道之前 允 直

本研究は水圏の中深層の微弱な光環境の変動と動物行動との関連性を明らかにすることを目標として、次のような測定および測定器の改良を実施した。

1. 平成6年度に申請した水圏の光環境を測定する装置を作成し、深部の光環境を測定したところ、水深100mまでS/N比のよい測定結果が得られた。この測定器を活用して、富山湾の中深層海域を中心に光環境の測定を実施し、同時に超高感度魚群探知機（古野電気の好意による貸与機）を用いて水面下の動物行動をモニターした。
2. 富山湾に面する漁港7港と香住、越前の漁港合わせて9港での過去5年間、日ごとの漁獲高を集計し、平成6年度は漁獲高調査に並行して、定期

的にホタルイカを採集し、アイソザイム分析により、群れの大きさと、その動態を調べた。

3. これらの測定と並行して、ホタルイカの発光機構を探る目的で発光物質の精製をおこない、純度の高い発光物質(タンパク質)の精製に成功した。

以上の結果、水圏の光環境測定用分光器を用いて中深層の波長分布を測定することが出来た。富山湾では予想以上に河川水の流入があり、表層部と水深約50mに汚濁層が形成され、光分布を歪めること、水深約30mに植物プランクトンの高密度層が形成されることなどがわかった。また、富山湾を中心にホタルイカの産卵時期にあわせ、超高感度の魚群探知機を借り上げた漁船に登載して、同イカの行動を終日監視した。この記録と上記光環境のデータ並びに潮流、潮の干満などのデータを合わせ、ホタルイカの産卵行動を調べた。ホタルイカは微弱な光変化に反応して、日没直後より浮上をはじめ、約2時間後には水深10m程度に達し、一旦、沖合いに層状の群れを形成し、その後、岸に向かって移動することがわかった。これまで、接岸は夜半過ぎから明け方と考えられていたが、接岸時間をもっと早い時期に訂正しなければならない。

当初計画した水圏用分光器はほぼ計画どおりの性能を発揮し、水深100mまで、うまく波長分布を測定することが出来た。しかし、予想以上の海洋汚染により、水深が深くなると急に光量が減少し、分光器の測定能力を越えることがわかった。これを解決するには、分光器の感度上昇が最も有効な手段であり、分光器の感度を高めることが急務となっている。

また、同イカは光環境に合わせ、その生物発光の色調や強度を調節している。発光の調節機構を探る目的で、発光物質の抽出、純化を進めてきた。その結果、発光タンパク質(中心色素団をもつタンパク質)の精製方法を確立する事ができた。これは分子量約6万の水溶性タンパク質であり、発光組織に微結晶状で存在し、pH変化に敏感で、pH8.5よりアルカリ側で溶解し、pH6.5前後で結晶状態を保ち、より酸性側で不安定となる。このような蛋白の例はゴニオラックスでの報告があるのみで、発光機構の分子の解決の手がかりを与えるものである。

現在、高純度のものを大量に得るため、精製法の改良を行っている。

平成6年度は上記のような研究を実施し、多くの知見を得たが、先の阪神大震災により、大半のデータと測定機器を失った。本年度、もう一度最初から

測定や実験をやり直し、データの集積に努力したい。

「ジェンダーと現代」(研究No.47)

責任者 井野瀬 久美恵

1994年度の「ジェンダーと現代」研究チームの活動の詳細は、以下の通りである。

1994年6月1日

川合清隆氏(本学文学部教授)

報告テーマ 「ルソーと女性差別」

本報告では、水田珠枝『女性解放思想史』とバダンテール『母性という神話』の二冊を基本に、ルソーが“育児書”として『エミール』を著さねばならなかった時代状況を分析し、ジェンダー理解に一石を投じた。

1994年6月1日

平野広明氏

報告テーマ 「ゲイを生きる」

「ジェンダーと現代」チームの主眼は、単に学問研究としてのみならず、現代社会の最前線におけるジェンダーの現実を探ることにある。教師でありながら、自らゲイであることを明言した平野氏にとって、ジェンダーとは何なのか?ゲイやレズビアンであることをカム・アウトする人びとがふえてきた昨今の状況や自らの体験を含めて、男らしさ、女らしさをめぐるさまざまな問題、そして家族との関係を語る平野氏の話は、同席した学生や社会人の心を大きく捉えた。と同時に、マスコミ報道を通じて多くの人びとが知るジェンダーの現実と、学問研究としてのジェンダー学の距離を、改めて認識させたといえる。

1994年7月1日

佐藤やよひ氏(本学法学部助教授)

報告テーマ 「国際結婚における夫婦の“氏”」

国際私法の専門家である同氏は、まず、“氏”の問題が国際的な争点となっている現実を具体的に紹介。そのうえで、文化や習慣、法律が異なる社会で育ったカップルの新しい姓がいかんして決まるのか、そこにいかなる問題が生まれる余地があるのか

を、やはり具体的に分析した。これは、前日の平野氏の講演とともに、「ジェンダーと現代」が組んだ連続講演だが、学生や社会人らの参加も目立ち、ジェンダーの最前線を考える刺激的な報告となった。

1994年10月28日

シンポジウム

「なんで私、採用されへんの？」

パネリスト

宮地 光子氏 (弁護士)

小森 尚子氏 (ワコール)

中井 優氏 (ワコール人事部)

谷 玲子氏 (リクルート)

井上さおり氏 (本学卒業生・生命保険会社を退職して転職を考慮中)

柳川 理恵氏 (本学卒業生・聴講生の主婦)

絹笠 真澄氏 (本学4回生)

八木 裕子氏 (本学卒業生・デイリー・スポーツ記者)

女子大生の就職難が社会問題化している昨今、何が彼女たちの採用を阻止しているのか——ややもすれば現実と乖離しがちなジェンダー研究を、大学の総合研究としておこなう意味のひとつがここにある。本シンポジウムでは、企業のなかでも女子大生の就職率のいいワコールとリクルートの人事関係、あるいはそこで自分の力を発揮する女性たちを招き、本学の在籍者、あるいは卒業生とホンネで討論してもらった。客席からも率直な質問が相次ぎ、2時間を越える活発な議論の様子は、神戸新聞紙上にも掲載された。

その後、1月下旬には、ジェンダーの国際シンポジウムを予定していたが、阪神大震災のために、やむなく中止せざるをえなかった。ジェンダーの最前線を知るうえで不可欠な企画であったがゆえに、やむをえぬ処置とはいえ、実に残念である。

この1年、特に気になったことは、アカデミズムのジェンダーが、ジェンダーの現実といかにかかわっているかである。今後、文化的、社会的概念としての「ジェンダー」理解を深めつつ、学問研究と現実のすき間をいかに埋めるかに、さらなる試行錯誤をくり返したいと考えている。(文学部助教授)

「国際的法摩擦をめぐる諸問題」(研究No. 48)

1993年末にGATTウルグアイランドの最終的な合意妥結を見たが、今後はGATTに代わってWTOの活動が国際的な自由貿易の発展に貢献するものとして注目される。経済のグローバル化は、そのための規範的枠組である制度と法の国際的・国内的な整備を必然的に要請している。また、従来の各国法の個性や独自性も再検討をせまられている。現に日本企業の国際取引・海外進出の急増、逆に海外からの日本市場への門戸開放の要求が高まる中で、日本法も外国法との「調和化(ハーモナイゼーション)」をせまられているといえる。それが目下のところ、どのような法分野で最も先鋭な形で現われているのか、それへの対応はいかにあるべきか、といった問題について共同研究を進めている。まずは、各メンバーからの個別研究の「中間報告」をここに紹介したい(字数の関係で一部省略)。

① 辰巳直彦：「周知のように市場統合を目指すEU(欧州連合)としては、EEC条約30条を根拠に、域内における商品の自由な流通の確保を重要課題としてきた。ところが、著作権、特許権等の知的財産権は国ごとの権利として構成されており(属地主義)、権利者には権利の対象たる製品や商品について生産する権利ばかりではなく、輸入権、頒布権さらには使用権というような権利が、形式的には国内の流通の各段階ごとに、これをコントロールすることが出来るというような形で認められている。その影響は絶大であり、そのために「流通保護」という観点からこの弊害を緩和しようとして、権利の『消尽(用尽)理論』が打ち立てられるようになってきた。これは、権利者はその同意のもとに権利の対象たる、例えば特許製品を、一旦国内の流通に置けば、それ以後は権利は「消尽」して、もはや国内における再譲渡や使用には権利が及ばなくなるというものであり、国際的にも承認された理論である。EUでは、これを加盟国各国内のみならず域内全域にわたる消尽に拡大して認める理論として、EU裁判所によって確立している。それは、確かにEU統一市場を前提とした法政策であるが、国境や地域市場を越えた国際的市場が現実に出現しつつある今日、さらに進んで国際的な商品の自由な流通を促す理論として「国際的消尽」が認められるべきではないか、というのが私見である。研究チームの研究会でも論じたが、新しい判例への評釈などを行いつ

つ、さらに理論化していきたい。」

- ② 正井章彦：「現在は、ドイツ企業法およびEUの会社法・労働法を主に研究している。1994年4月から1995年3月10日までに公表した論文として、以下のものがある。まず、『ECにおける国際的合併に関する規制』（現代企業と有価証券の法理〔河本一郎先生古稀祝賀〕（有斐閣）は、EU会社法の調整の一つとして、株式会社の国境を越えた合併を促進する目的で提案された第10指令案（1985年）の紹介・検討を試みたものである。次に『EC会社法における監査制度』（企業監査とリスク管理の法構造〔蓮井良憲先生＝今井宏先生古稀記念〕・法律文化社）において、業務監査および会計監査に関するEUの第5指令案（1983年）および第4指令について、日本法との比較という視点から検討した。そして、『ドイツにおけるコーポレート・ガバナンス』（ジュリスト1050号）は、監査役会、株主総会・株主に付与された取締役のコントロールに関する株式法上の具体的規定について解説し、次いでドイツの法的規制の評価および最近の監査役制度の動きを紹介した。さらに、『EUにおける労働者の国境を越えた情報入手権・協議権』（国際商事法務23巻1号）では、超国家的企業における労働者の保護を狙いとする1994年の指令を紹介・解説した。」

- ③ 酒井 一：「本年度の研究活動は、以下のとおりであった。なお、国際民事訴訟法の分野で、とくに外国判決の承認・執行の問題に関心をよせているのであるが、これまでのところ十分な研究成果を公表するに至っていないが、それは今後に期することとしたい。

昨年の夏、英国カーディフで開催された国際家族法学会およびオランダ・ハーグ・アカデミーに参加し、渉外的身分法および取引法、ならびに国際民事訴訟法上の諸問題についての報告・講演を聴く機会に恵まれた。そこで再認識させられたのが、国際民事訴訟法における仲裁の重要性である。近時、わが国でも外国仲裁判断に対する執行判決の付与に関する判決が相次いで下されていることが目を引く。この問題は、外国訴訟行為の効力問題として、外国判決の承認・執行とも共通する問題であり、今後の検討課題に属する。」

- ④ 黒田忠史：「日米構造障壁協議（SII協議）が進む中で、株主代表訴訟制度の改善、独占禁止法の適用強化、行政手続法の制定、規制緩和、外国

人弁護士の活動の自由化、などを始めとした様々な法分野での改正・立法化作業が始まっている。それは、戦後日本社会の「制度疲労」に対する消費者側からの要求でもあったが、日本人の「法感覚」の根本的な反省をせまる要因も含んでいると思われる。とはいえ、日米間に顕著に見られるこのような「法摩擦」は、実はEUと日本の間でも見られたのであり、さらには米中間の知的財産権協議、米・EU間の農業交渉、専門職資格の相互承認をめぐる交渉、などといった形で、日本以外の諸国間でも発生しているのである。このような今日における国際的な法的紛争が、歴史的に見て、どのような特質をもっているのか、そこで語られる「法文化の衝突」という視点がどの程度有効であるのか、について比較法文化論の方法を模索しつつ考えている。」

次に、我々の共同研究チームが主催した研究会は、先行するEU法研究チームの公開研究会「甲南EUフォーラム」を継承しつつ、以下のように行われた。

- ① 平成6年4月8日、第13回公開講演会「欧州連合（EU）における法的統一の現状」（講師：ドイツ・ハーゲン大学法学部ウルリッヒ・アイゼンハルト教授）。講演の邦訳は、『甲南法学』第35巻第1号（1994年発行）に掲載。
- ② 同5月21日、第14回公開講演会「ドイツにおける法曹養成と法の国際化」（早稲田大学大学院法学研究科研究生、アニヤ・ペーターゼン氏）
- ③ 同10月28日、第15回公開研究会「EUにおける知的財産権のハーモナイゼーション」（チーム・メンバー、辰巳直彦氏）
- ④ 同11月30日、第16回公開講演会「EU統合と日本企業——銀行と企業での私の体験から——」（日工株式会社常務取締役・管理本部長、中島要氏）
- ⑤ 同12月21日、第17回公開講演会「自己防衛権の法理——日・米・ニュージーランド間の法制度・法文化の相違」（ニュージーランド国オークランド大学准教授・神戸学院大学法学部客員講師ジョージ・モスラキス氏）

なお、本年（平成7年）1月19日に、第18回甲南EUフォーラムとして、正井氏（チーム・メンバー）による報告「EUにおける労働者の国境を越えた情報入手権・協議権」を予定していたが、阪神大震災のために5月に延期した。ゲスト・スピーカーには、

交通費程度の薄謝にもかかわらず熱のこもった講演をして頂き、一般市民や学生（特に②は約200名、⑤は450名余）に感銘を与えて頂いた。また毎回、チー

ム・メンバー以外の学内外の研究者にも参加して頂き、活発な質疑応答ができたことに感謝している。（研究幹事 黒田忠史）

平成7年度研究課題およびチーム

研究課題（No.49） 母乳哺育に関する研究

●研究内容の概要

わが国の経済成長とともに生活水準が向上し、物質的には豊かで恵まれた時代となり、労働面では、男女雇用機会均等そして夫婦共働きのように女性進出の社会となってきた。出産・育児の形態もそれまでの家庭あるいは助産所での出産から産院・病院での出産へと変わり、出産方法も自然分娩から陣痛誘発剤による分娩・帝王切開と医療機関に大きく依存した方向へ変わりつつある。出産後の授乳方法も人工乳（粉ミルク）による哺育、母乳哺育あるいは両者併用と様々である。このような出産及び哺育形態の複雑化したなかで、母乳哺育の重要性が再認識されようとしている。

本研究では、母乳哺育と人工乳による哺育を総合研究分野から比較検討し母乳哺育の本質を明らかにすることを目的とする。母乳及び粉ミルクに含まれる無機ミネラルを分析することにより化学面からの情報をえるとともに、栄養学および心理学の分野からの評価さらに実践面からの評価を加え、総合的に母乳哺育を解析しようとするものである。

●研究の特色

母乳、乳児用調整粉乳（粉ミルク）についての栄養学的評価、たとえば三大栄養素（タンパク質、脂質、糖質）の比較は報告されているが、微量の無機必須ミネラル（必須微量元素）の観点にたった母乳哺育の評価についてはほとんど例がない。生命維持に欠くことのできない必須微量元素は、最新の医学分野でも注目されており、動脈硬化、循環器、糖尿病、肝疾患、神経疾患、ガン等様々の病理・疾患と微量元素の関係が現在論議されている。

本研究では、母乳及び粉ミルク等の試料中の必須常量元素・必須微量元素の成分濃度の分析を行い、得られた化学的情報から栄養学的評価を試みる。さらに、授乳という行為を母児の心理面からアプローチし、母乳哺育を人工乳哺育と比較し、心理学的評価を試みる。以上のように、総合的な学問領域にわたった母乳哺育に関する研究はほとんどみあたらない。

●総合研究として研究することの必要性

研究の特色で述べたように、母乳哺育を本質的に解析するには、化学、栄養学、心理学といった専門分野の研究者および母乳哺育の経験豊富な実践者の協力が不可欠である。

●研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

研究員（氏名）	所属	分担者の研究課題
○ 玉 利 祐 三	理	分析化学及び化学成分からの評価
松 尾 恒 子	文	心理学からの評価
金 乙 祥	韓国ダン コック大学	栄養学からの評価
毛 利 種 子	毛 利 助 産 所	出産・哺育の実践面からの評価

●研究内容の概要

近代イギリスの思想と文学を対象として学際的な研究を試みる。

研究メンバーのうち、松村、村岡、渡邊、西篠、井野瀬、中島、小寺は18～20世紀のイギリスを研究テーマに選び、文学、歴史的コンテクストから近代イギリスを理解しようとする。高橋は経済思想史の立場から、また安西は日本との比較から、高野は宗教的な側面から、イギリス近代の諸相を照射し、その関連性を浮きあがらせる。

●研究の特色

① 本研究チームは、昭和61年に開始した「ヴィクトリア朝の文化」研究以来、継続しているイギリス研究チームである。

② 海外の研究機関と連携をとり、相互交流する。

●総合研究として研究することの必要性

近代イギリスの文化は多様な形態を呈しているため、学際的な総合研究なしには、全体像を把握することは不可能である。そこで各自の専門分野を統合し、共通理解を促す必要がある。

●研究チームと研究の分担 (○は研究幹事)

研究員 (氏名)	所 属	分担者の研究課題
松 村 昌 家	文	ヴィクトリア朝の文学とジャーナリズム
村 岡 健 次	〃	ヴィクトリア朝の社会史
渡 邊 孔 二	神戸大学	イギリスのロビンソン物語
西 篠 隆 雄	文	1830年代のイギリス小説
○ 中 島 俊 郎	〃	写真とジャーナリズム
井野瀬 久美恵	〃	移民と都市計画
高 橋 哲 雄	経	「フランケンシュタイン」をめぐる人と時代
小 寺 里 砂	京都女子大	ディケンズとロンドン
安 西 敏 三	法	明治日本と19世紀イギリス
高 野 清 弘	〃	フッカーとその周辺

●研究内容の概要

1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災は、家屋や人体に甚大な被害をもたらしたのみならず、被災地域の人々の心の奥底にも深い傷跡を残した。震災の非常時から時間が経過し、ライフラインが復旧し、外的生活が一見日常を取り戻していくにつれ、逆に慢性的なさまざまな心理的問題が顕わになっていく。たとえば、1993年7月に北海道の奥尻島で起こった震災の場合でも、10ヶ月後に行なわれた被災者への調査で、多くの割合の人々が重い抑うつや無気力に陥っていることが判明している。災害後の「心のケア」と言うとき、直後の危機介入とともに、長期的・継続的な回復への取り組みがもう一つの不可欠な柱となる。そこで、本研究チームはそのような取り組みの一環として、今回の地震で被災した人々の心理状態が継続的にどのように変化するのか、そしてその変化のプロセスには、年齢・職業その他の背景によりどのような差異が見られるのかを明らかにすることを目的とする。

●研究の特色

震災後の心理状態に関する調査研究は、現在いろいろなところで始められつつあるが、本研究の特色は、まず2年間という研究期間を生かして、同一の被災者の継続的な心理状態の変化を追跡調査できるという点である。それから第2の特色は、本大学が被災の中心地にあるという特性を生かし、今回の震災の生の記録を収集できるという点と、それらの研究を通して、地域の人々の心理的回復を援助することができるという点である。

●総合研究として研究することの必要性

今回のような震災によって生じた心理的問題については、いわゆる臨床心理学的な症状論・治療論の枠組の中では捉え切れない多様な要因が含まれている。そのため、被災者、ボランティア、教師、報道関係者、防災心理学の専門家、ノースリッジや奥尻島の震災に関わった研究者、などさまざまな立場から震災を体験した人々と交流し、また共同研究を進めていく必要があると考えられる。

●研究チームと研究の分担（○は研究幹事）

研究員（氏名）	所属	分担者の研究課題
○ 高石 恭子	文・学生 相談室	被災学生の心理相談事例
松尾 恒子	文	被災後の東灘区における復興活動
森 茂起	文	被災後の心理的ケアの方法論
皆藤 章	大阪市立 大	ノースリッジ地震との比較研究
友久 茂子	学 生 相談室	被災者の心理的回復プロセスにおける性差
太田 雅久	理	被災後の心理的活動レベルの継続的变化

【総合研究所人事異動】

1995年4月1日より、経済学部選出委員は高橋哲雄教授より岡田元浩助教授に引き継がれた。

